

院御願寺領の形成と展開

― 中世前期の最勝光院領を素材に ―

高橋一樹

The Formation and Development of Royal Goganji Lands: The Saishokoin Temple Lands in Early Medieval Japan

はじめに

- ① 最勝光院領の立荘
- ② 立荘の経緯と仏事体系
- ③ 荘園支配の変質
おわりに

〔論文要旨〕

王家や摂関家の中世荘園は、それぞれの家政機関（院・女院庁や摂関家政所）や御願寺に付属するかたちで立荘・伝領される。本稿はこのうち王家の御願寺領荘園群の編成原理と展開過程の分析を通じて、個別研究とは異なる角度から中世荘園の成立と変質の実態について論じた。具体的な素材は、関連文書と公家日記等の記録類とを組み合わせて検討しうる、十二世紀後葉に建立された最勝光院（建春門院御願）の付属荘園群をとりあげた。最勝光院領の編成と立荘については、落慶直後から寺用の調達を目的に六荘園がまとめて立荘され、その後も願主の国忌（法華八講）などの国家的仏事の増加に対応して新たに立荘が積み重ねられた。その前提には、願主やその姻族（平氏）と関係の深い中央貴族から免田や国衙領が寄進されたが、実際に立荘された荘園は国衙領や他領をも包摂した複合的な荘域構成をとっており、知行国主・国守との連携にもとづく国衙側と協調した収取関係（加納・余田の設定）をもつ中世荘園の形

成であった。また、最勝光院領に典型的にみられる立荘と仏事体系のリンクが、御願寺および付属荘園群の伝領を結びつけており、御願寺の継承者が仏事を主催し付属荘園から用途を徴収する現象の原理をここに見いだしうる。

鎌倉幕府の成立した十三世紀以降の最勝光院は、各荘園の預所職を知行する領家（中央貴族）たちの寺用未進に対処するべく、同院政所を構成する別当・公文の主導のもと寺用にみあう下地を荘園内で分割して、その特定領域における領家の所務を排除する事例が多くみられた。下地を分割しない場合も含めて、これらの寺用確保の下支えになったのは地頭請所であり、その背景には幕府との政策連携があったことが推測される。これは領主制研究の枠組みのみで論じられてきた従来の下地中分論や地頭請所論とは大きく異なる評価であり、荘園制支配の変質と鎌倉幕府権力との関係を問う視角も含めて問題提起を行った。

はじめに

日本中世の王家が管領した膨大な荘園群には、いくつかの構成単位がある。そのおもなものは、上皇や女院の家政機関たる院庁・女院庁に直属する「庁分御庄」をはじめ、天皇とその后や院・女院などを願主とする御願寺の荘園、いわゆる御願寺領が多数をしめる。戦前以来の皇室領研究では、これらの各単位ごとに付属する荘園が網羅的に検出され、その数量的把握や伝領関係の究明に力点が置かれていた。

このような研究動向の基底に、王家領を「寄進地系荘園」の集積とする通説的理解があったことはいうまでもない。在地領主制の展開を前提とした所領寄進の連鎖に荘園成立の契機をもとめる研究段階では、王家の御願寺などは「荘園寄進の受け皿」か、国司が荘園寄進を認めざるを得ないイデオロギー的側面の評価にとどまり、御願寺領の荘園群としての形成過程や編成原理の追究は等閑視されていたのである。

御願寺領というまとまりに着目して荘園群の成り立ちを分析したのは、安楽寿院領を素材とした永原慶二氏の研究が最初である。ただし永原氏も安楽寿院領を「寄進地系荘園」ととらえて王家の荘園所有形態を論じており、依拠した史料の時代性の問題を含めて多くの課題を残した。そして、この安楽寿院領以外には、建久二年(一一九一)の荘園目録に立脚して長講堂領の各荘園の来歴を整理した研究がみられるにとどまる。

しかし、近年にいたって御願寺とその荘園は国家財政論や儀礼論の視角から研究が深化し、それをふまえて女院領を分析する研究も頻出している。また荘園制論の立場からは、御願寺領の形成を「寄進の受け皿」ではなく貴族社会側の主体的な中世荘園の立荘と位置づけ、御願寺で開催される国家的な仏事等の用途を配分する相折と対応した荘園設立の実態が追究されている。御願寺領という枠組みに着目して荘園群の立荘と

その編成のあり方を分析することが、国家論ともリンクした荘園制研究の課題として明確に意識されてきたといえよう。

本稿はこのような研究状況をうけて、中世荘園の立荘が本格化した十二世紀後半における院御願寺領の形成と、鎌倉末期にいたるその展開過程を検討する。具体的な分析対象としては、後白河院の寵妃建春門院(平滋子)を願主とする最勝光院の荘園群をとりあげる。

最勝光院は後白河院の院御所である法住寺殿内に建立され、承安三年(一一七三)十月に落慶供養が行われた。その造営時から鎌倉末期の東寺への寄進にいたるまでの経過は、すでに杉山信三氏や臈谷寿氏の研究によって概略が明らかにされている。とくに臈谷氏は、十二世紀後半を中心に最勝光院をとりまく政治的環境や仏事状況にも論及している。

最勝光院における仏事の執行形態は近年の寺院・儀礼研究でも注目され、天皇の御願寺を主体とする六勝寺と同様に、寺務を担当する上卿と弁の設置が指摘されている。上卿には建春門院の実兄にあたる平時忠が就き、後白河院と建春門院の院司を兼ねる藤原経房が弁となったことから、十二世紀後葉の最勝光院については経房の日記である『吉記』に多くの記事がみられる。本稿ではまず、この『吉記』以下の記録類や関連史料を駆使しながら、十二世紀後葉における最勝光院領荘園の形成過程を復元する。そして、鎌倉末期に作成された最勝光院領荘園目録の内容にいたる荘園群の変質について論ずる。

なお、最勝光院領荘園については東寺領荘園の前身をさぐる視角から上島有氏が俯瞰しており、近年では中世前期からの各荘園ごとの来歴をまとめた『東寺とその庄園』も刊行されている。本稿もこれらの成果に負う部分が少なくないが、これまで論及されていない史料や見解を異にする事実も含めて、東寺領の前史ではなく立荘・伝領の単位たる院御願寺領の形成という切り口から考察を進めることにしたい。

①最勝光院領の立荘

最勝光院に付属する莊園群は、正中二年（一三二五）三月日付の最勝光院領莊園目録¹²（以下、「莊園目録」と略称する）により二〇ヶ所が確認できる（表1）。しかし、これらのすべてが最勝光院の落慶と同時に立荘・集積されたわけではない。最勝光院領としてのまとまりに留意しながら、各莊園ごとに成立過程を丹念にたどっていく作業が必要である。とりわけ最勝光院の落慶直後における莊園形成の動きは、前述した藤原経房の日記『吉記』によって把握することができる。最勝光院にかかわる雑事の院奏および下達を通じ、同院執行と後白河院・建春門院とのパイプ役をはたす経房のもとには、所領寄進をめぐる交渉などの情報が集まり、経房はそれを日記に記録していたのである。本章ではまず、この『吉記』の記事と関連史料をもとに、十二世紀後葉に立荘時期がもめられる最勝光院領莊園について個別に検討したい（立荘・確認年代順。『吉記』の記事にもとづく叙述箇所は年月日のみを記し典拠を省略した）。

①近江国檜物荘

承安四年（一一七四）二月二十六日、吉田経房の「最勝光院御庄々」についての院奏に対し、後白河院は檜物荘の「年貢供壇餅之外、可加進米三十石」と命じている。「莊園目録」によれば、この「年貢供壇餅」は修二月会の用途であり、この段階で檜物荘は最勝光院の修二月会に壇供餅などを年貢として負担することを条件に立荘されようとしていたことがわかる。なお、約半年後の同年八月二十二日に経房が建春門院に奏した三ヶ条のなかに、「檜物庄押取金勝寺領間事」がみえる。檜物荘の立荘が行われたことを確認できるとともに、金勝寺は後白河院領となっていた興福寺一乗院の末寺としてこの年に立券され、勝打打ちにより寺域が画定された可能性が高いことから、在地レヴェルで両者間に境界相論が起きていたと推測される。

②周防国嶋末荘

承安四年八月九日、経房のもとに内大臣源雅通の使者が訪れ、嶋末荘に関して何事かを申し入れた。翌十日、その内容が院奏され、経房は後白河院から指示を受けている。この経過から、村上源氏の氏長者である源雅通が嶋末荘を知行していたことが知られる。村上源氏中院流の家領リストとされる「中院流家領目録草案」¹⁴にも「嶋末」とあり、立荘過程に関与していたことが推測される。

すでに別稿でふれたように、嶋末荘は源雅通からの寄進所領とは別に「余田」を包摂しながら立荘された。莊域内の「余田」は、莊園領主を介して国衙に官物を弁済する国衙領であり、承安四年二月二十六日に経房が「最勝光院御庄々事：嶋末庄事」を院奏した際にも、後白河院は「国庫に弁済する官物を注申すべし」と命じている。国衙側も鎌倉後期にいたるまで、この嶋末荘の「余田」を国衙単位所領の嶋末として認識していた。

③越前国志比荘

承安四年二月二十六日、経房が「最勝光院御庄々事：志比庄事」を院奏しているのが初見。浅香山木氏は志比荘の成立時に越前斎藤氏の役割を推測するが、その具体像は不明である。

④信濃国塩田荘

まず『吉記』承安四年中の記事から関連する内容を掲げる。

八月五日 已刻参院、奏六ヶ条事、…別当申所領等寄進最勝光院事、

八月十三日 别当申信濃庄事、仰年貢猶少思食、可注申所当、

八月十六日 早参院、奏条々事、别当申信濃国塩田郷年貢、可進千段事、仰、可進寄文、

九月八日 辰刻参院、奏雜事三ヶ條、塩田庄使事、

八月五日に検非違使別当藤原成親による所領寄進の希望を聞いた後白

表1 鎌倉末期の最勝光院領荘園

荘名	領家	本年貢	綾被物	兵士役	備考
播磨国桑原庄		米五十石	七月八講・三月月忌	六月十人	
本郷	山科中将入道	十五石			
上揖保	刑部少輔入道	十五石			
下揖保	冷泉中将頼成	十五石			
平位村	三位法印泰豪	六石			
摂津国山辺庄	故右大弁兼頼跡	統松二十把・檜物雜器	七月八講・十二月月忌	三月五人	
和泉国堺庄	今林准后	油二石	七月八講・十二月月忌	九月七人	
備前国福岡庄	一乗院僧正坊	(高倉院正月八講・月忌・孟蘭盆用途) 米七十二石・上絹十五疋四丈・ 綿百両・綾十三疋・油一斗九升 ・白細美布二十六反			
長田庄	室町院	油五石	七月八講・五月月忌	二月七人	御念仏料所
備中国新見庄	坊門中将入道後家	石炭三十石	七月八講・十二月月忌	十月十人	
讃岐国志度庄	東二条院	米五十石	七月八講		
周防国美和庄	仏師院修法印	米五十石			
肥前国松浦庄	菅三品	上絹百二十疋			御念仏衣服料所
肥後国神倉庄	浄土寺僧正坊	米三百石	七月八講・九月月忌	七月十人	
筑前国三原庄	関東備前守・小山出羽入道息女	綿千両・国絹十疋・油二石	七月八講・十月月忌	五月七人	御念仏料所
越前国志比庄	嵯峨中納言法印坊跡	畳四十帖	七月八講・六月月忌	十二月十人	
出雲国大野庄	聖護院宮	米百五十石	七月八講・正月月忌	正・二月十三人	
近江国湯次庄	坊城中納言	米百石・修二月壇供餅百四十枚	七月八講・十一月月忌	四月十人	
檜物庄	聖護院宮	米四百五十石	七月八講・四月月忌	八月十人	
遠江国原田庄	随心院僧正坊	米百石	七月八講		
村櫛庄	故陸奥守重將跡	白布千六十段	七月八講・二月月忌	十一月十人	
信濃国塩田庄	地頭関東武蔵左近大夫將監請所	国絹百疋	七月八講・八月月忌	閏月三人	
常陸国成田庄	持明院左兵衛督保藤	(記載なし)			
丹波国佐伯庄	松橋僧正				

河院は、十三日に「年貢猶少」との意向を示した。これに対して成親は十六日に、信濃国塩田郷の年貢として千段を納入することを申し入れたため、院もそれを了承して寄進状の提出を命じた。九月に入って実際の立荘手続が開始されたとみえ、勝打ちなどのために現地に下向する院使と考えられる「塩田庄使事」⁽¹⁷⁾が院奏されている。

以上の経過から、塩田荘の立荘の前提に藤原成親による塩田郷の寄進が行われたこと、ただし年貢額の交渉が決着してから寄進状が作成されたこと、などが知られる。なお、この時期の信濃国は、成親の弟である実教を国守として藤原忠雅が知行していた。⁽¹⁸⁾忠雅は成親・実教の父家成（鳥羽院第一の寵臣）の女婿である。成親・実教・忠雅は後白河院の近臣として知られるが、とくに成親と忠雅は建春門院にも仕えており、同女院をとりまく人脈が塩田荘の立荘を導いたことが推測される。

⑤ 遠江国村櫛荘

承安四年九月十日、備後守為行が申請していた最勝光院への所領寄進が後白河院・建春門院に伝えられている。その翌々日、再び経房が院奏した際の記事によると、遠江国に所在する為行の所領はかれが何らかの権限を有する国衙領であり、後白河院は最勝光院領として立荘作業を進めることを了承している。「莊園目録」は遠江国の最勝光院領として原田荘と村櫛荘を載せるが、前者は待賢門院御願寺の法金剛院領として成立したことが知られるから、⁽¹⁹⁾為行の寄進所領と結びつくのは村櫛荘である可能性が高い。なお、為行は飛騨守も歴任した典型的な院近臣受領であり、後白河院の近習下北面として目立つ存在だったという。⁽²⁰⁾後白河院領の傾向として「北面下臈等、競立新立庄、甚不便」⁽²¹⁾といわれるように、こうした立荘のパターンは数多く存在したと考えられる。

⑥ 近江国湯次荘

正治二年（一一〇〇）二月の吉田経房処分状案に「近江国湯次庄⁽²²⁾最勝光院件庄者最勝光院建立之時、予所申建也」とある。最勝光院并である経房

みずから立荘に関わり知行したことがわかる。倭名抄郷に系譜する湯次郷との関係が注目されるが、『吉記』に関連記事は確認できない。

⑦ 肥前国松浦荘

安元元年（一一七五）十二月日付の大宰大貳庁宣案および治承二年（一一七八）六月二十日付の後白河院庁下文案⁽²³⁾によると、筑後前司大江国兼から私領を譲られた肥前々司大江国通は、それを保延五年（一一三九）の鳥羽院庁下文により「別符」とした。この所領は国通の女子大江氏から三代にわたって伝領したが、安元元年八月ころに建春門院の乳母である若狭局（平政子）がその調度文書を譲り受け、建春門院に寄進した。その結果、建春門院庁下文および「院宣」が発給され、同院庁分の松浦荘として正式に立荘のうえ国役も免除された。同年十二月の大宰大貳庁宣はそれを施行したものである。ところが、翌年七月に建春門院が死去したため、松浦荘は若狭局の治承二年二月解状によって最勝光院へ再寄進され、同年六月の後白河院庁下文がその再立券を命じたのである。

⑧ 讃岐国志度荘

『玉葉』治承五年（一一八一）七月二十四日条に「法眼志度庄事、示付静賢了⁽²⁴⁾最勝光院領也」とあり、九条兼実の弟慈円が志度荘について何事かを最勝光院執行の静賢に申し入れている。建永元年（一一〇六）の慈円起請文によると、慈円は乳母の西園寺通季女子から志度荘や下総国松岡荘など相伝所領四ヶ所を譲り受けていた。このうち松岡荘は、蓮華王院の付属荘園として承安四年（一一七四）三月以前に成立しており、志度荘も慈円が譲得する前に西園寺家との関係から最勝光院領として立荘されていたと考えられる。

なお、西園寺家は建春門院と関係が深く、同女院に近侍する女房の一条は西園寺家の出身であった。『健寿御前日記』は、この一条に対する父西園寺公通と同腹兄実宗の後見ぶりを記すが、かれらは慈円の乳母と兄弟・甥の関係にあたる。

⑨ 備前国福岡荘

『簡要類聚鈔』第一卷に備前国福岡荘の成立について「五条大納言備前国々務之時庄号令寄進高倉院御并了、最勝光院領也」とあり、藤原邦綱が備前国主として立荘し、高倉院の菩提を弔うために最勝光院領に寄進したことがわかる。邦綱は撰関家の家司をとめる一方、平清盛と緊密に連携し憲仁親王（のちに高倉天皇）の春宮権大夫となるなど、「平氏与党貴族のうちで中心的な位置をしめる人物」とも評されている。⁽²⁶⁾ 邦綱が備前を知行した期間は永万元年（一一六五）七月から治承五年（一一八五）三月までと考えられ、高倉院の死去した治承五年正月とも時期的に符合することから、福岡荘の立荘は治承五年はじめと考えられる。

⑩ 筑前国三原荘

三原荘は寿永三年（一一八四）四月五日付の源頼朝安堵状案にみえ、後白河院が頼朝に「給預」した平家没官領に含まれていたものを、頼朝が平頼盛に知行を安堵（返付）した。その荘域は筑後国三原郡の北半から筑前国にまたがっており、建仁元年（一一〇一）十一月日付の筑後国高良宮上下宮并小社等造営所課荘々田数注文案によると、筑後国分の三原荘は公田数五百町をこえる巨大な郡名荘であった。平頼盛が大宰大貳として異例の現地赴任を遂げた十二世紀後葉に立荘された可能性が指摘されている。⁽³⁰⁾

⑪ 備前国長田荘

嘉暦元年（一一三六）六月十八日付の前石見守平繁成寄進状に、「件庄者、冷泉局能子寄進最勝光院、於庄務者、可令相伝領掌之由、寿永三年成賜院庁御下文」とある。この冷泉局は、建春門院の実姉の冷泉局ではなく、平教盛の女子で後白河院に近侍した冷泉局能子である。寿永三年（一一八四）は後白河院が院政を復活し備前国などを院分国としており、院に仕える冷泉局の寄進所領を基礎に国衙領の紙工保などの単位所領を包摂して長田荘が立荘されたものと考えられる。⁽³³⁾

⑫ 播磨国桑原荘

文治二年（一一八六）六月、後白河院が源頼朝に梶原景時らの押領を停止させるようにもめた播磨国内の所領のなかに、「掛保桑原」とあるのが初見。つづく建久三年（一一九二）正月日付の後白河院庁定文案に「掛保桑原庄、最勝光院領」とあり、後白河院の愛妾高階栄子（丹後局）が預所職を知行する王家領荘園であることがわかる。そのなかには、高階栄子の生母である若狭局から相伝した⑦肥前国松浦荘や播磨国安田荘、摂津国志宜寺（いずれも預所職）などが含まれており、これらと同様に掛保桑原荘も若狭局から栄子に預所職が伝領された可能性が高い。⁽³⁶⁾

掛保桑原荘はこの後、高階栄子から「桑原庄」と「掛保庄」に分割して平業兼と山科教成にそれぞれ譲与され、建久三年三月日付の後白河院庁下文により安堵されている。栄子は荘域を倭名抄郷に系譜する桑原郷と掛保郷に二分して子息一人に譲与したのであろう。ただし、「荘園目録」にみえる桑原荘は、掛保桑原荘の全域を指し、平業兼に譲られた「桑原庄」のみではない。「荘園目録」では桑原荘の内部単位として、本郷・上掛保・下掛保・平位村を記すが、この本郷は桑原郷、つまり平業兼に譲られた「桑原庄」を指し、上・下掛保と平位村は掛保郷、つまり山科教成が譲得した「掛保庄」の分割された単位である。したがって最勝光院領桑原荘（掛保桑原荘）は、本郷＝桑原郷を中核に掛保郷を付け加えるかたちで立荘されたことになる。

⑬ 肥後国神倉荘（詫麻荘）

神倉荘の成立過程を論じた工藤敬一氏は、王家領の郡名荘である「詫麻庄」が建久五年（一一九四）に分割（片寄せ）された結果、長講堂領安富荘（詫麻本庄）と最勝光院領神倉荘（詫麻新庄）が成立したこと、「詫麻庄」は長講堂と最勝光院にその得分をあてるために後白河院が上から設定したと述べている。⁽³⁸⁾ 院権力による「詫麻庄」の立荘という工藤氏の指摘をふまえつつ、「詫麻庄」における本庄と新庄の成立についてはも

う少し突っ込んだ解釈が可能である。

まず「託麻庄」は、官物を免除された本庄と国衙領のままの加納を合わせた庄域、つまり「託麻本庄・加納」という内部構造をもって立荘されたと推測される。建久二年（一一九一）十月の長講堂領目録は本庄（安富庄）を「庁分」としているから、この本庄を中心とする「託麻庄」はもともと後白河院庁分の庄園として立荘されたのであろう。その後、庄域内の加納＝国衙領についての官物が免除されて最勝光院への年貢に振り替えられ、新庄となった。また長講堂の建立にともない本庄の庁分年貢が長講堂の寺用に充てられ、本庄が長講堂領とされた。こうして「託麻庄」における本庄＝長講堂領安富庄と新庄＝最勝光院領神倉庄との区分が確立したと考える。ひとつの中世庄園を構成する本庄と新庄で領主や庄園名が異なる事例は少なくない。⁽³⁹⁾

⑭丹波国佐伯庄

寿永二年（一一八三）二月日付の建礼門院庁下文案によると、丹波国佐伯郷内の時武名を伝領した秦頼康は、その官物不輸を認めた国司庁宣を得て時武名を高倉院法華堂に寄進した。そして時武名は、年貢を「最勝光院正月御八講御燈明・御布施・被物并法花堂御国忌雑事」に充てることを条件に高倉院法華堂領として認められている。

最勝光院の仏事用途をも負担する高倉院法華堂領時武名が「莊園目録」にみえる丹波国佐伯庄と深く関わることはまちがいない。しかし佐伯庄は庄域内に隼人司領の便補保などを包摂した中世庄園であり、⁽⁴¹⁾時武名がそのまま立荘されたものではない。

そこで注目されるのが、ほかの高倉院法華堂領が後鳥羽親政下の建久八（九年（一一九七））に集中して立荘されていることである。たとえば、尾張国富吉庄は「建久八年六月二十八日官宣旨」により立券されているし、⁽⁴²⁾太政官厨家領でもある安芸国世能荒山庄は高倉院法華堂の正月国忌用途が近年断絶したため建久九年に「給官使、堺四至打勝」した

れている。⁽⁴³⁾佐伯庄に関しても、庄域内に包摂された隼人保を含めて「建久検注帳」が作成されていることから、寿永二年に寄進された官物不輸の時武名を中核として、建久八年に官宣旨を得て立荘されたものと考えられる。

⑮備中国新見庄

建武四年（一一三七）六月二十五日付の法印信尊契約状案に「備中国新見庄者、開発領主大中臣孝正、讓官長者隆職」とあり、大中臣孝正なる者から官務家の小槻隆職に寄進された所領が新見庄の立荘に結びついたことが知られる。小槻隆職は官務の地位と職務を利用して、十二世紀後葉に本領主からの寄進所領やみずからの開発所領をもとに、各地で数多くの便補保や庄園を立てており、⁽⁴⁶⁾新見庄も同時期に立荘されたと考えられる。

⑯周防国美和庄

延慶三年（一一三〇）八月三日付の官宣旨案によると、美和庄は十二世紀後半に活躍した仏師院尊の相伝所領を基礎に立荘された。院尊の所領は嘉応三年（一一七一）に藤原盛光から譲与された国免庄とする記述もみられるが詳細は不明。院尊は承安四年二月ころから法住寺殿内の法華堂（のち建春門院法華堂）の造営に仏師として関わり、奉行をつとめる経房と頻繁に接触している。院尊の所領寄進とそれをうけた美和庄の立荘も、この関係を介したものである可能性が考えられる。

以上、十二世紀における最勝光院領庄園の立荘について概略を述べてきた。その結果をまとめると表2のようになる。

表2にまとめた十六ヶ所のほかに、「莊園目録」では摂津国の山辺庄と堺庄、出雲国大野庄、常陸国成田庄があげられている（⑤で述べたように遠江国原田庄は法金剛院領として立荘）。山辺庄は十一世紀末から十二世紀末まで伝領がたどれる頭并藤原通俊の所領との関係が指摘されてお

表2 12世紀後葉における最勝光院領の立荘

国名・荘園名	立荘年次	寄進所領・寄進者	
①近江国檜物荘	承安四年		
②周防国島末荘	承安四年		源雅通
③越前国志比荘	承安四年		
④信濃国塩田荘	承安四年	塩田郷	藤原成親
⑤遠江国村櫛荘	承安四年	国衙領	備後守為行
⑥近江国湯次荘	承安四年		藤原経房
⑦肥前国松浦荘	治承二年	別符	若狭局政子
⑧讃岐国志度荘	治承五年以前		西園寺家力
⑨備前国福岡荘	治承五年	国衙領	藤原邦綱
⑩筑前国三原荘	寿永三年以前		平頼盛
⑪備前国長田荘	寿永三年		冷泉局能子
⑫播磨国桑原荘	文治二年以前		
⑬肥後国神倉荘	建久五年以前		
⑭丹波国佐伯荘	建久八年	時武名	秦頼康
⑮備中国新見荘			小槻隆職
⑯周防国美和荘		国免荘力	院尊力

④、大野荘についても『吉記』承安四年二月十七日条に「大野庄使事」とあるのと関係するかもしれないが、いずれも立荘の具体的な史料は得られなかった。

逆に島末荘のように、同時代史料で立荘の過程が確認できるものの、「荘園目録」に記載されていない事例もある。また、「荘園目録」にはなく他の史料に最勝光院領と記される荘園として、丹波国和久荘と河内国大和田荘がある。このうち大和田荘については、平頼盛室で光盛母にあたる女性の相伝所領を後白河院に寄進した結果、建春門院法華堂領大和田荘が立荘され、同荘の知行を認める院庁下文が発給されたことが知られる。^{④⑨}この建春門院法華堂は安元二年（一一七六）に建春門院が死去した際に葬られた法華堂であり、最勝光院と同じ法住寺殿内に造営された蓮華王院に付属する御堂である。このため最勝光院領の立荘過程をまとめた表2には大和田荘を含めていない。

このようにみえてみると、「荘園目録」の記載内容は最勝光院の創建から一定期間を経て荘園群を編成しなおした姿であることがわかる。次章では、表1・2にもとづき年貢等の負担体系の問題を含めて具体的な分析を進めることにしたい。

②立荘の経緯と仏事体系

かつての荘園制研究では、御願寺領は願主である院や女院に中央貴族から上分が寄進されていた荘園が施入されるものと考えられていた。しかし近年の研究が個別荘園の例から論じるように、これは誤った理解といわざるを得ない。

最勝光院の荘園設立を網羅的に検討した結果が示すように、十二世紀後葉の院御願寺では、願主である院や女院の承認を得て付属荘園を設定するという方針のもとに、中央貴族から所領が寄進され立荘が行われた。

しかも、寄進所領の実態は国衙領や国免荘（免田）などであり、既存の公家領荘園からの上分寄進ではありえない。その証拠に、実際に立荘された荘園は、寄進所領とは別に国衙領や他領などを包摂した複合的な荘域構成をとっている。そして、包摂された国衙領は加納ないし余田などとして国衙への官物并済を継続しており、国衙の財政と両立した荘園形成である。院分国主や知行国主が積極的にかかわった最勝光院領の設定は、そうした中世荘園の立荘とその特質を象徴する事例といえることができる。

最勝光院領における立荘形態と荘域構成を右のようにまとめよう。その立荘の時期については、表2からも看取できるように、安樂寿院領などと同じく落慶直後の立荘が多く確認できる。建春門院を願主とする最勝光院は平氏権力と関係が深く、付属荘園の立荘に寄進所領を結びつけた貴族たちの顔ぶれにも親平氏の公卿や実務官僚をみることができ。平清盛が鳥羽院政下の藤原家成と同様に御願寺の造営とセットで付属荘園の立荘に介在したことは別の機会に述べたが、この最勝光院領の形成も治承以前は平氏権力との関係を重視する必要がある。ただし、寿永以後もひきつづき立荘は行われている。そこでつぎに、実質的な立荘勢力の動向とは別に、院御願寺領の編成という視点から立荘の経緯について検討しよう。

最勝光院領荘園の設定に関する動きを確認できるのは、承安四年二月十一日に経房が「最勝光院庄事」を含む雑事八ヶ条を院奏したのが初見である。最勝光院の落慶供養から四ヶ月を経たこの時期、付属荘園の立荘作業は遅延していたようで、翌々日の二月十三日には、経房を通じて後白河院庁と最勝光院のあいだにつきのようなやりとりがあった。

下総国別進白布、可宛最勝光院用途之由、有其仰、仍副御教書、送遣静賢法印許、御庄々未定之間、且所給也
白布百三十二反也、別進百五十二反也、 残遣御倉了、

付属荘園が未定のため寺用を賦課できず、後白河院庁から執行静賢のもとに白布が送り届けられている。臘谷寿氏の指摘するように、この白布は数日後の最勝光院で催された理趣三昧会で布施等に使用された可能性が高い。最勝光院では落慶時に封戸を施入された形跡もないことから、創建当初から経済的な基盤を荘園にもとめ、その新立をはかる方針であったことがわかる。

前章での検討によると、最初の付属荘園としては承安四年の後半に①⑥がほぼまとまって新たに立荘されている。これは、同年九月十六日に「最勝光院御庄々寄文六通」が後白河院庁から執行静賢に送付されたことに符合しており、最勝光院領は六荘園から出発したことがわかる。このうち立荘時の同時代史料から判明する負担内容は、①檜物荘の壇供餅・米三十石と④塩田荘の白布千段であり、「荘園目録」にみえる両荘の本年貢と品目が一致する（ただし年貢量は微妙に異なる）。そこで残りの②志比荘・⑤村櫛荘・⑥湯次荘の本年貢を「荘園目録」から摘記すると、それぞれ綿千両・国絹千疋・油二石、米百石、米百五十石となる。立荘時からの変化が予想される年貢量はひとまず措いて、その品目だけをならべると、当初の最勝光院領六荘園は壇供餅・米・白布・綿・国絹・油などを本年貢として立荘されたことがわかる。

これらは、最初の付属荘園が確定していない承安四年前半に最勝光院で催された仏事における仏供料や布施用途の品目の一部、さらには日常的に必要な灯油料に一致している。たとえば、承安四年二月二十三日から三十日にかけて最勝光院小御堂で行われた理趣三昧会の用途をみてみよう。まず初日までに仏供・僧供料の米や装束、散花、数砂、畳などが調達され、それらは院庁御倉、諸国、寺家沙汰、年預・御所預への所課であった。結願日の布施については、綾被物・装束・白布・綿・国絹などが最勝光院上卿の平時忠から進納されている。最勝光院におけるこうした仏事用途のすべてが、立荘後の荘園所課により調達されるようにな

るわけではなく、荘園設定後も布施用途を院庁と寺家の両方が用意している事例もみられるが、これらの用途のなから立荘前の交渉時に年貢の品目と額を選択・決定して、付属荘園の立荘に進んだと考えられる。⁽⁵³⁾

さらにこの点を裏づけるのが、藤原定家の日記『明月記』にみえる記事である。すなわち、承安三年十月の落慶供養から約半世紀を経た嘉祿二年（一二二六）六月、最勝光院は放火によって焼失の憂き目にあうが、藤原定家は「天下第一之仏閣」と称賛したその御堂の焼失を歎いて、つぎのように記している。

夜火果而是最勝光院云々、予雖非可縁之身、幼稚之昔、眼前見彼草創之時、築壇被引地、雖未出仕、耳聞供養嚴重之儀、爾來繼体守文君、雖宝祚相伝、只有權勢近臣之貪寺領、無一分之修理、仏聖灯油断絶、布施用途滅亡、書堂紛閣、遂年月為埃塵、（中略）遣青侍宗弘、令見彼御堂、未時帰来、南西之諸門并半作破壊、塔不焼、預承仕等悲泣之外、人不見云々、面々述懐、仏聖灯油断絶、諸庄兵士一人不参、夜半許御堂火付之由有告者、驚出而見之、⁽⁵⁴⁾

定家によると、最勝光院の「寺領」はおもに修理科・仏聖灯油料・布施用途・兵士役を負担するものとして位置づけられていた。このうち兵士役は、平治元年（一一五九）の宝莊殿院領目録に毎月兵士二名を負担する荘園がみえるように、御願寺を日常的に維持するために必要な課役であった。たとえば『吉記』寿永元年二月十七日条にはつぎのよう記事がみえる。

黄昏、参転輪院、今夜修二月也、（中略）上座任尊来座前示云、当院近々有若亡、閑院人々一切不被参、諸国御封併以未済難行之由雖申上、無用途之成敗、不可違式日可行之旨、依被仰下、如形所行也、有護摩施不行之、毎日供養法如形所行也、依無庄園無兵士、讒難済御封許也、執行言談如此、

鳥羽院が生母の菩提を弔うために建立した御願寺の転輪院では、寺用

を封物収入に依存していたが、諸国からの封物納入が滞り仏事の実施もままならないうえ、荘園がないため兵士役を賦課できないという。⁽⁵⁵⁾ 兵士役は荘園でないと賦課することのできない課役であることがわかる。そして、寺用相折に即した本年貢とならんで付属荘園の立荘理由にもなりえた。承元四年（一二一〇）九月日付の後鳥羽院庁下文によると、藤原宗行の所領寄進状に明記された毎年国絹三十疋と一月兵士三人の負担を条件に最勝四天王院領加賀国右荘の立荘が命じられている。⁽⁵⁶⁾ 最勝光院でも承安四年八月五日に「最勝光院兵士事」が院奏されており、承安四年に立荘された六荘園が当初の兵士役を負担したと思われる。

では、承安四年の六荘園よりのちの立荘は寺用の増加にみあうものと推測されるにしても、具体的には何を契機としていたのであろうか。この点を考えるうえで参考になるのは、つぎの史料である。

最勝光院

注進 一年中御仏事

- 一 正月御八講 講師十六口 自十四日至十七日 高倉院御国忌
 - 一 二月十五日夜 修二月
 - 一 七月御八講 講師十口 自八日至十二日 建春門院御国忌
 - 一 同十五日孟蘭盆講 建春門院 高倉院 両院御菩提
 - 一 十月八日御念仏 自八日 至十五日
 - 一 毎月二ヶ度御月忌 十八日建春門院御月忌 十四日高倉院御月忌 新写法華経供養
- 右、任例注進如件、

正中二年正月 日⁽⁵⁸⁾

正中二年（一二三五）に最勝光院の執務職と付属荘園が東寺に寄進されるにあたって注進された年中仏事の内容である。もちろん、これらの仏事は創建当初から一斉に行われていたわけではない。最勝光院における各仏事の初見年次を公家日記などから検索すると、つぎのようになる。

・修二月会 承安四年（一二七四）二月九日（『吉記』）

・建春門院月忌 治承元年（一一七七）三月八日（『愚昧記』）

・御念仏 治承元年（一一七七）十二月二日（『玉葉』）

・七月御八講 治承二年（一一七八）七月八日始、十二日結願

（『玉葉』ほか）

・孟蘭盆供 治承四年（一一八〇）七月十五日（『山槐記』）

・正月御八講 寿永二年（一一八三）正月十九日始、二十二日

結願（『玉葉』ほか）

少し補足しておく、修二月会が年中仏事注文のように二月十五日から催されるようになったのは安元元年（一一七五）からである（『玉葉』）。正月八講が正月十四日始となるのは文治二年（一一八六）が初見である（『玉葉』）。また、御念仏と孟蘭盆は初見年次より以前から開始されていたことが典拠史料の記載からうかがえる。

このように最勝光院の年中仏事は、創建から十数年間に増加し整備されていったことが知られるが、その中核は願主である建春門院とその子高倉院の菩提を弔う法華八講（国忌）である。これらの国家的仏事と最勝光院領の追加立荘とが直接にリンクすることは、前章で述べたつぎのような事例から明らかである。

すなわち、備前国主藤原邦綱による⑧福岡荘の立荘は高倉院の菩提料負担を条件として養和元年に行われ、⑨佐伯荘の前身である時武名が寿永二年に寄進される際には、国司庁宣による官物免除の振り替えとして年貢を「最勝光院正月御八講御燈明御布施被物并法花堂御国忌雑事」に宛てることを条件としている。また、⑦平政子による松浦荘の再寄進が建春門院の死去にともなうもので、その再立券が治承二年六月に実現したのも、翌月からの法華八講（建春門院国忌）の開始にともなうものとみてよい。中央貴族たちは最勝光院に近い人脈を駆使して落慶後もこれらの機会をとらえ、みずからの所領を寄進し最勝光院領の立荘に結びつけたのである。

以上の検討をまとめると、最勝光院では仏事用途の一部や灯油料・兵士役などを負担する六荘園が落慶の翌年にまとめて立荘され、その後は願主である建春門院や高倉院の国忌といった国家的仏事の増加などに対応する用途調達を理由に、新たな立荘を重ねていった。この点、同じ女院の御願寺として十三世紀初頭に建立された歎喜寿院（七条院御願寺）の場合は、「以相伝之庄園、為建立之寺領者、古今之勝蹟、院宮之佳例也、爰彼院早雖遂供養之儀、未定置仏聖之備、勤修非一、寺用惟多、仍以此御願、欲充用途⁽⁵⁹⁾」というように、願主の女院が管領する既存の荘園を施入することが「佳例」といわれており、最勝光院領がつぎつぎと立荘された十二世紀との段階差を浮き彫りにしている。

また、最勝光院領のように院御願寺領の立荘と仏事体系がリンクしていることは、御願寺（堂舎）と付属荘園群の相伝を不可分の関係に結びつけ、その継承者が国忌等の仏事を主催し付属荘園から用途を徴収⁽⁶⁰⁾することを必然化したともいえる。そして、立荘に寄進所領を結びつけ預所職を知行することになった中央貴族も、御願寺とその付属荘園群を伝領した院ないし女院に仕えて寺用相折にもとづく年貢・公事を納入し、子孫に預所職を伝える必要に迫られたのである。

十二世紀後葉における最勝光院領の立荘状況と鎌倉末期の「荘園目録」との関係については、後者に記載された年貢等の負担内容が最勝光院における年中仏事の全体像に対応していることから、前述のように最勝光院で法華八講（国忌）や月忌、孟蘭盆会などの仏事が出そろった十二世紀末葉以降に各荘園の負担体系が再編成されたものと考えられる。この点を中心に、次章では鎌倉期以降の最勝光院領について概観しておきたい。

③ 荘園支配の変質

さきにふれた『明月記』嘉禄二年(一二二六)六月の記事は、十三世紀前葉の最勝光院で付属荘園からの年貢納入が悪化していた状況を伝えている。藤原定家はその理由として、知行者たちによる「寺領の貪り」をあげているが、「荘園目録」でも同じく知行者(領家ないし領主)からの所済が滞っている事実が記されている。それらを見ると、鎌倉末期の最勝光院公文が把握しているだけでも、建長年中や文永・弘安年間を最後に年貢等が減済ないし未済の状態となっているが、なかでも⑧志度荘に関しては「御寺回禄之時以後、被物之外一向無所済」とあり、嘉禄二年の最勝光院焼失以後は七月御八講(建春門院)・御月忌(両院)の綾比(被)物二重のみしか納入されていないことがわかる。

⑧志度荘の所済状況をしめす、この記載内容を素直に解釈すると、建春門院御八講と毎月二回の月忌に用いられる綾被物の負担体系は、嘉禄二年以前に整っていたことになる。さらに後白河院死去直前の建久三年(一一九二)正月に、同院庁が長講堂などとならんで最勝光院に関する起請を定めた文書⁽⁶¹⁾をみると、常套句的な表現ながら「凡厥寺用相折庄園敷地等油田同載別云々」とあり、基本的な荘園所課の体制はすでに整えられていたとみられる。つまり「荘園目録」の御八講・月忌に関する負担体系は、高倉院御八講の開始された寿永二年(一一八三)以後、とくに年中仏事の整備と連動しつつ十二世紀末葉から嘉禄二年までのあいだに編成されたと推測できよう。

この間、建久三年二月には最勝光院が後白河院から後鳥羽天皇に譲与⁽⁶²⁾され、退位後に院政を開始した後鳥羽院が承久の乱後に配流されるまで、最勝光院での仏事は後鳥羽院が主催している。建久三年には、官掌所の重公事分配状が四番編成で作成され、最勝光院の修二月と二回の御八講

を含めて、後鳥羽治政下における仏事の執行体制が整えられた。また、建久八年に最勝光院の堂舎が強風のために破損した際にも、後鳥羽院は官使を派遣し実検を行わせて、御八講以前に修理が完了するように補修を行っている⁽⁶⁴⁾。ただし、平氏の強い影響下に多くの公卿・殿上人が仏事に参入した後白河院政期の最勝光院の面影はなく、治承・寿永の内乱後は正月御八講に上卿すら不参加の状況となり、建永二年(一二〇七)の正月御八講では「無人」というありさまであった⁽⁶⁶⁾。

後鳥羽院政期の最勝光院では、このように内乱前の求心力は低下していたものの、二回の御八講をはじめ、修二月や御念仏などの仏事自体は維持されていた。十二世紀の白河・鳥羽に次々と建立された数多くの御願寺が堂舎を失い、仏事の開催場所を変えていくなかで、最勝光院も前述した嘉禄二年の火災でほぼ焼失する。しかし、翌三年には再建の上棟を行い、これ以後は蓮華王院の新御堂として正月・七月御八講などの仏事を実施する場となった⁽⁶⁸⁾。新生の最勝光院における御八講以下の仏事開催は十三世紀後葉まで公家日記に散見されるが、弘安年間にいたると「荘園目録」の記載にあるように年貢・公事の減済・未済が急増する。ただし、この間も仏事に必要な用途などを付属荘園から調達する努力は続けられていた。

ところで、最勝光院は承安三年(一一七三)十月二十一日の供養日に北院御室・守覚法親王が検校に補任されていたが、寺務の執行は後白河院の近臣僧である静賢が掌握していた。ところが後白河院の死後、静賢の活動は記録類から一切みえなくなる。それにかわって浮上してくるのが最勝光院政所である。

守覚法親王の死後、建仁三年(一一〇三)二月十五日には同じく御室の道法法親王が最勝光院検校に補されるが、『御室相承記』六の「後高野御室」同月十五日条には「最勝光院往来并書下等、修理別当権少僧都定勝持参」として、つぎのような文書を収録している。

最勝光院政所

立 檢校二品法親王御供米往來事

右所立如件

建仁三年二月 日 公文西市正大江朝臣景宣

修理別当権少僧都 在判

興味深い文書だが、ここでは最勝光院政所を構成する公文と修理別当に注目しよう。公文の大江景宣は、鎌倉中期から修理職年預を世襲する大江氏⁽⁷³⁾（景を通字とする）の一族と考えられ、鎌倉末期に「莊園目録」を注進した「公文左衛門少尉大江」も同族の大江景朝である⁽⁷⁴⁾。景朝より二、三代前の景親は蓮華王院公文をつとめ、つづく景長（景親の子か）は弘安五年（一二八二）に蓮華王院総社公文となっているが、前述のように最勝光院が鎌倉中期の再建以降、蓮華王院の新御堂として位置づけられたことからすると、鎌倉前期から末期の東寺施入にいたる最勝光院の公文は、この大江氏一族によって相伝されたと考えられる。東寺に施入される以前の最勝光院領に関する文書・帳簿などが東寺に伝来しているのも、この景を通字とする大江氏が最勝光院公文として受給・保管していたものが、東寺に引き渡されたのであろう。なお、「莊園目録」を注進した公文の大江景朝には、

公文所別当／長井 大江 貞秀 ナラン

との付箋があり、やはり大江姓の鎌倉御家人で有力な法曹吏僚である長井氏の同族と推測されている。もちろん景朝は長井貞秀ではないが、景朝と同時期に活動し同族とみられる景繁は鎌倉の二階堂氏と知音の仲である⁽⁷⁵⁾ことも知られるから、この大江氏一族は鎌倉幕府との深い関係を有していたと考えられる。

一方、修理別当の定勝は東大寺別当顕恵の子息・弟子でかれの創設した東大寺西室を継承し、顕恵と同様に小野法印と呼ばれた⁽⁷⁶⁾。「莊園目録」によると、⑨福岡荘では小野法印が寺務の時に吉井村を最勝光院の寺用

分として切り出し、最勝光院の執事公文が永仁七年（一二九九）まで知行していたという。小野法印定勝が最勝光院の修理別当として寺務を掌握していた十三世紀初頭に、福岡荘の自家寺用分の下地が特定されたことがわかる。

最勝光院では、この⑨福岡荘を早い事例として、寺用の確保をはかるべく莊園支配の大胆な改革に乗り出す。上島有氏も注目しているように、その具体的な手段が福岡荘吉井村のような寺用分にみあう下地の切り出しであった。

最勝光院領の莊園内でこうした寺用確保の動きは鎌倉後期に頻発する。たとえば⑩美和荘では、興福寺東北院覚円あての徳治三年（一二三〇）四月十九日付後宇多上皇院宣案の追而書に「最勝光院寺用事、被切出兼行方於寺家之上者、向後不可有彼寺之綺候也」とある⁽⁸⁰⁾。また、前述したように立荘時からの最勝光院領ではないが、河内国大和田荘も嘉暦元年（一二三六）の十月九日付後醍醐天皇綸旨に「最勝光院領河内国大和田庄寺用事、為当寺領之上者、於切出候下地者」とみえる⁽⁸¹⁾。さらに、これらに先行するかたちで遠江国原田荘においては、永仁三年（一二九五）につぎのような鎌倉幕府裁許状が発給された。

最勝光院領遠江国原田庄細谷郷雜掌与地頭原小三郎兼泰法師 法名 相論本家方預所可郷務否事

右、訴陳之趣、枝葉雖多、所詮当庄本家者最勝光院也、領家者隨心院僧正坊跡也、而領家職相論之間、依對捍本家方年貢、就本家訴訟、以細谷郷止領家綺、一向被付本家上、可全所務之由、雜掌雖申之、領家方預所、自往古居住本郷、止徵納年貢□□令運進本家之間、本家方更不相綺所務云々、而今割分当庄、以細谷郷被付本家、以本郷以下被付領家、可致所務、就中細谷郷者、最狭少之上、令混^{本家一戸}領家者、可□細谷郷之地頭歟也、然則^{本家一戸}任先例、可致其沙汰者、依鎌倉殿仰、下知如件、

永仁三年九月九日

陸奥守平朝臣 御判
相模守平朝臣 御判⁽⁸²⁾

原田荘の領家をめぐる相論が原因で最勝光院の本案年貢が未納となったため、最勝光院と領家とのあいだで所務の分割が争われた。鎌倉幕府はこれをうけて原田荘を分割し、細谷郷を最勝光院に、本郷以下を領家に付けて所務を行わせることにした。つまり細谷郷の雑掌と地頭の相論という体裁をとりながら、実際は本家と領家の所務が鎌倉幕府の裁定により下地の分割をともなうかたちで分離されたことがわかる。しかも細谷郷における本家と領家の「混領」を避けるのは、地頭の利害にかかわるからであるという。

公武権力の裁許にもとづく以上の事例は、すべて最勝光院と領家との下地分割であるが、これは従来いわれてきたような本所一円領を創出するものではない。なぜなら、いずれの場合も最勝光院に切り出された下地には地頭が存在し、実際の年貢収納と納入は地頭が行っていたからである。

前述した⑨福岡荘の吉井村はその典型例であり、しかも同村を最勝光院公文として知行していた大江氏は鎌倉幕府とも通じていたから、福岡荘吉井村からの年貢調達は公武権力の人脈を介して維持されたことがわかる。また、③志比荘では領家を排除して、地頭から直接に最勝光院へ寺用米を納入することが鎌倉幕府により命じられ、地頭側も請文を提出している⁽⁸³⁾（ただし地頭と領家が結託して年貢未進は続く）。このような動きをまとめてみると、鎌倉後期における最勝光院寺用の調達は、立荘時に作られた領有体系の大幅な改変を含みながら、むしろ最勝光院公文と鎌倉幕府との人的関係や鎌倉幕府の支持する地頭請所によって下支えされていたともいえる。

一方、下地の分割を行っていない荘園でも、立荘以来の領有体系はき

わめて複雑なものとなっていた。たとえば、⑪長田荘では最勝光院の寺用を維持したまま大覚寺に本家職の寄進が行われている⁽⁸⁴⁾。⑫桑原荘の分割譲与された下掛保荘でも、領家の山科教成が京都山科に造立した御影堂に上分を寄進し、実際の荘務執行を伝領した教成の子孫同士が鎌倉後期に相論を惹起して、一方が御影堂を後深草院へ寄進している⁽⁸⁵⁾。また、前述した⑩美和荘で兼行方が切り出された理由は、領主の院派仏師間における相論を打開するための興福寺東北院の覚円へ寄進であった。同じく吉井村を分割した⑨福岡荘でも、立荘を推進した藤原邦綱から領家の地位と得分が興福寺一乗院に寄進されたが、その一方で文治元年（一一八五）には後白河院から源頼朝に福岡荘が平家没官領として「給預」され、一旦は元暦元年（一一八四）に頼朝から崇徳院法華堂で行われる同院国忌の料所として寄進されている⁽⁸⁶⁾。これらは、重層的な「職の体系」が十二世紀から十四世紀まで整然と存続するかのように説く従来の「寄進地系荘園」論では説明できない、領有体系の複雑化・分節化をしめす現象である。

さらにこれまでの研究では、鎌倉期の荘園支配をめぐる矛盾を荘園領主対在地領主（地頭）という構図でとらえ、それにもなう年貢未進の増加、荘園の顛倒という歴史過程が描かれてきた。最勝光院領の先行研究についてもその例外ではない。しかし現実をみると、この構図は必ずしも正しくない。むしろ最勝光院領では、領家など貴族社会における知行者の年貢・公事の対捍が深刻であった。その背景には、伝領をめぐる相論の激発やそれにもなう再寄進⁽⁸⁷⁾など、領有体系や得分関係のめまぐるしい錯綜と改変があった。

こうした状況に対して鎌倉幕府は、最勝光院から提起される具体的な訴訟への裁許を通じて、本家と領家の関係を整理して下地を分割し、さらに地頭請所を導入するなど本所年貢の維持をはかった。荘園領主の領有体系は、鎌倉幕府権力によって変質を余儀なくされたのである。

以上、本稿では中世前期における最勝光院と付属莊園の動向を整理し、院御願寺領の形成から変質にいたる過程を概観してきた。最勝光院と付属莊園に関する基礎的な事実関係のほかに、莊園制研究の方法論としては、公家日記等の記録を基軸に文書を組み合わせて分析したこと、それにひとつの御願寺領という枠組みで院政期の立荘から鎌倉後期の変質までを通して分析したこと、などに付け加える内容があったものと考ええる。最後にこの点を確認して擲筆したい。

- (1) 永原慶二「荘園制の歴史的位置」(『日本封建制成立過程の研究』岩波書店、一九六一年。初出は一九六〇年)。
- (2) 福田以久生「安楽寿院領荘園について」(『古文書研究』第9号、一九七五年)。
- (3) 大山喬平編・解説「長講堂目録と島田家文書」(思文閣出版、一九八七年)、菊池紳一「長講堂領の成立について」(『古代学協会編』『後白河院』吉川弘文館、一九九三年)。
- (4) 研究史は井原今朝男『日本中世の国政と家政』(校倉書房、一九九五年)を参照。
- (5) 近年の女院領をめぐる研究史は、布谷陽子「王家領の伝領と女院の仏事形態——長講堂領を中心に——」(入間田宣夫編『日本・東アジアの国家・地域・人間——歴史・文学と文化人類学の方法から——』入間田宣夫先生還暦記念論集編集委員会、二〇〇二年)を参照。
- (6) 川端新「荘園制成立史の研究」(思文閣出版、二〇〇〇年)、丸山仁「院政期に

(7) 杉山信三『院家建築の研究』(吉川弘文館、一九八一年)。

(8) 臘谷寿「最勝光院―院政期における仏教行事の場―」(『田村圓澄先生古希記念
会編『東アジアと日本』宗教・文学編、吉川弘文館、一九八七年)。

(9) 海老名尚「中世前期における国家的仏事の一考察―御願寺仏事を中心として―」(『寺院史研究』三号、一九九三年)、遠藤基郎「院政期儀礼体系の素描―仏事を中心に―」(羽下徳彦編『中世の政治と宗教』吉川弘文館、一九九四年)。

(10) 上島有「東寺寺院經濟に関する一考察 特に最勝光院領庄園について」(読史会編『国史論集』一、一九五九年)。

(11) 『東寺とその庄園』(東寺宝物館、一九九三年) 所収の「庄園紹介」。

(12) 宮内庁書陵部所蔵。註(11) 所引「東寺とその庄園」掲載のカラー図版による。
(13) (東京大学史料編纂所) 荘園絵図調査報告一〇 金勝寺

勝示絵図」(『東京大学史料編纂所研究紀要』第6号、一九九六年)。

(14) 国学院大学久我家文書編纂委員會編『久我家文書』第一卷、三号文書。
(15) 高橋一樹「莊園公領制」から「中世莊園制」へ（『歴史評論』六三、二〇〇二年）。

(16) 浅香年木『治承・寿永の内乱論序説』(法政大学出版局、一九八一年)。

(17) 増補史料大成「吉記」では「塩田庄事」とあり「使」が抜けているが、高橋秀樹編『新訂吉記』本文編一（和泉書院、二〇〇二年）にもとづき訂正した。

(18) 『玉葉』承安二年閏十二月七日条、『公卿補任』文治五年藤原実教の項。

(19) 文永二年二月七日、遠江國三代起請地并三社領注文案(教王護国寺文書、『静岡県史』資料編5中世二)。

(20) 角田文衛「後白河院の近臣」(註(3) 所引『後白河院』)。

(21) 『玉葉』建久三年二月十七日条。
(22) 正治二年二月二十八日藤原経房処分状案（勸修寺家文書、『鎌倉遺文』補三五八号）。

(23) 京都大学所蔵古文書纂、『平安遺文』三七三四号。東寺百合文書サ、『平安遺文』三八三六号。なお、西井芳子「若狭局と丹後局」(註(3))所引『後白河院』を参照。

(24) 建永元年慈円起請文(門葉記、『鎌倉遺文』一六五九号)。

(25) 『京都大学国史研究室所蔵一乗院文書(抄)』(京都大学文学部国史研究室、一九八一年)。

(26) 田中文英『平氏政権の研究』(思文閣出版、一九九四年)。

- (27) 『日本史総覧』Ⅱ古代・中世Ⅰ所収の「国司一覽」(菊池紳一・宮崎康充編) 備前国の項による。
- (28) 註(14) 所引「久我家文書」第一巻。
- (29) 国立歴史民俗博物館所蔵田中穰氏旧蔵典籍古文書。工藤敬一「高良宮造管役と筑後の荘園公領——歷博所蔵新史料の紹介——」(同『中世古文書を読み解く』吉川弘文館、二〇〇〇年。初出は一九九三年)を参照。
- (30) 前註所引工藤敬一論文。
- (31) 京都大学所蔵古文書集、『岡山県史』編年史料。
- (32) 建春門院の実姉にあたる冷泉局は寿永三年以前に死去している。
- (33) 高橋一樹「中世荘園の形成と『加納』——王家領荘園を中心に——」(『日本史研究』四五二、二〇〇〇年)。
- (34) 『吾妻鏡』文治二年六月九日条。
- (35) 高橋一樹「歷博所蔵田中本の山科家旧蔵文書と播磨国揖保荘」(『揖保川町史』第三巻資料編付録巻報第一号、二〇〇一年)。
- (36) 註(23) 所引西井芳子論文。
- (37) 国立歴史民俗博物館所蔵田中穰氏旧蔵典籍古文書。『田中穰氏旧蔵典籍古文書目録』(古文書・記録類編)(国立歴史民俗博物館、二〇〇〇年)を参照。
- (38) 工藤敬一「荘園公領制の成立と内乱」(思文閣出版、一九九二年)。
- (39) 類例は註(6) 所引高橋一樹論文。なお、「詫麻庄」の本庄(安富荘)と新庄(神倉荘)の田数は、それぞれ二五九町八段と七二六町五段で、合わせて八七六町三段となる。本免(本庄)を大きく上回る国領などを加納として立荘されたことが推測できる。
- (40) 国立歴史民俗博物館所蔵田中穰氏旧蔵典籍古文書、『平安遺文』四〇七四号。
- (41) 註(33) 所引高橋一樹論文。
- (42) 文保二年十月日高倉院法華堂領尾張国富吉荘雑掌申状案・文保二年十二月二十三日関東御教書案(『図書寮叢刊』壬生家文書)。
- (43) 建久九年官宣旨案(『図書寮叢刊』壬生家文書)。
- (44) 『経俊卿記』正嘉元年九月十三日条。
- (45) 東寺百合文書ミ、『岡山県史』家わけ史料。なお、石井進「荘園の領有体系」(網野善彦他編『講座日本荘園史』2 荘園の成立と領有、吉川弘文館、一九九一年)を参照。
- (46) 勝山清次「便補保の成立について——「納官済物」納入制度の変遷——」(同『中世年貢制成立史の研究』塙書房、一九九五年。初出は一九七六年、本郷恵子「中世公家政権の研究」(東京大学出版会、一九九八年)。
- (47) 永島福太郎「七條大宮公所関係の一新史料」(『美術研究』第一五八号、一九五一年)ではじめて紹介され、この官宣旨案は現在、国立歴史民俗博物館に収蔵されている。永島氏による史料紹介はかつて川端新氏よりご教示いただいた。
- (48) 『大阪府史』第二巻第三章第十節「摂河泉の荘園と公領」(河音能平・宮川満執筆分、一九九〇年)。
- (49) 寛喜元年六月日平光盛処分状案・安貞三年二月二十日平光盛讓状案(註(14) 所引「久我家文書」第一巻)。
- (50) 註(6) 所引高橋一樹論文。
- (51) 註(8) 所引臘谷寿論文。
- (52) 『吉記』同日条に経房が記すように、「寄文六通」は公驗文書として「可令候寺家」ものであり、その送付は院庁の沙汰で立荘された荘園を寺家に付属することを象徴するのであろう。
- (53) たとえば『吉記』寿永元年七月八日条。井原今朝男「公家領の収取と領主経済」(註(4) 所引井原著書。初出は一九九一年)は「上皇家でも、安楽寿院・最勝光院など「国王の氏寺」とは区別された寺院では院領に依存したと思われる」と述べている。確かに荘園所課への依存度は大きい、必ずしも井原氏の想定どおりではない。
- (54) 塩田荘の立荘交渉で藤原成親の申し出に年貢額の不足を感じた後白河院が「所当を注すべし」と命じたように、年貢の決定は寺用相折との関係だけでなく寄進所領のある国の特産品や国領への所当額なども勘案されたと考えられる。
- (55) 『明月記』嘉禄二年六月五日条。
- (56) 『仁和寺諸院家記(願證本)』(『仁和寺史料』寺誌編一)にも「当院無庄園、一向に諸国封戸、被宛寺用之間、上古者無懈怠、及于末代、諸国司皆對捍之故、全分無寺用顛倒了」とある。
- (57) 関戸守彦氏所蔵文書、『加能史料』鎌倉一。
- (58) 正中二年正月日最勝光院年中仏事次第注進状(東寺百合文書外、『鎌倉遺文』二八九六四号)。
- (59) 承久三年四月一日官宣旨案(東寺百合文書外、『鎌倉遺文』二七三五号)。なお、田中稔「通智院御勤仕御修法等目録」紙背文書(『醍醐寺文化財研究所研究紀要』第七号、一九八五年)を参照。
- (60) 近藤成一「鎌倉幕府の成立と天皇」(石上英一他編『講座前近代の天皇』第1巻、青木書店、一九九二年)。
- (61) 建久三年正月日後白河院庁最勝光院起請案(高山寺所蔵東寺文書、高山寺典籍文書総合調査団編『高山寺古文書』)。
- (62) 『玉葉』建久三年二月十八日条。
- (63) 建久三年十一月日官掌所重公事分配状案(『図書寮叢刊』壬生家文書)。
- (64) 建久八年閏六月二十五日最勝光院大風破損堂舎等注進状・同年後六月二十九日後鳥羽天皇綸旨(東寺文書御、東京大学史料編纂所架蔵影写本による)。

- [illegible]

The Formation and Development of Royal *Goganji* Lands: The Saishokoin Temple Lands in Early Medieval Japan

TAKAHASHI, Kazuki

Royal and regent household *shoen* of the medieval period were established and transferred as lands attached to their household administrations (i.e., the offices of retired monarchs and their wives, the *mandokoro* of the regent family) and to temples founded by royal prayer (*goganji*). By analyzing the formative principles and developmental processes of royal temple *shoen*, this study addresses the true nature of the emergence and transformation of medieval-period *shoen* from a perspective different from that of individual research. Specifically, the study investigates the set of *shoen* attached to Saishokoin temple (founded late 12th century with the prayers of Shunkenmon'in) through a combination of related documents and aristocratic diaries. The Saishokoin lands were secured immediately following the temple's completion with the founding of six *shoen* for the purposes of provisioning the temple. This was subsequently followed by the creation of additional *shoen* in response to increased Buddhist services performed on behalf of the state, including *hokke hakko* services in memory of the temple's founder. This growth was premised on donations of tax-exempt fields (*menden*) and *kokuga* lands by central aristocracy with deep ties to the founder and the Heiji (related by marriage).

The *shoen* that were eventually established subsumed *kokugaryo* and other lands, creating a composite *shoen* the formation of which involved negotiated tax arrangements (i.e., the creation of appended and tax-exempt fields, *kano* and *yoden* respectively) with the local *kokuga* offices of allied administrative officials (*kokushu*, *kokushi*). The familiar connection between the *shoen* and temple activities as exemplified by Saishokoin effectively tied the prayer temple to any transfer of the *shoen*. This reveals the underlying principle by which successors to the temple, responsible for conducting Buddhist services, requisitioned their means from the attached *shoen*.

Following the Kamakura bakufu's establishment in the 13th century, the *ryoke* of the central aristocracy, who controlled the offices of *azukarisho* for individual *shoen*, frequently failed to submit temple taxes. This led, under the guidance of the *betto* and *kumon* of the temple's administrative office (*mandokoro*), to the parceling of land within each *shoen* for temple use and the exclusion of the *ryoke* from administrative positions. Including cases in which no subdivision occurred, the principle guarantors of temple needs were the local managers (*jito-ukesho*), a fact from which a backdrop of coordinated policy with the bakufu can be inferred. This conclusion differs markedly from prior studies of land parceling and *jito-ukesho* conducted within the parameters of research on the *ryoshu* system. With the new issues it raises, the study provides a perspective that questions the relations between the power of the Kamakura bakufu and transformations in the system of control over *shoen*.
